

平成 26 年度栄区傷害サーベイランス分科会 議事要旨

<全体講評>

- SCの取組が実質化してきており、良い議論ができ実りのある会議だった。
- 委員、参加者からの指摘・意見をしっかり受け止め、必要な情報収集に取り組むなど、活用して欲しい。
- 実績から課題を明確にし、27年度の取組としてまとめているところは評価でき、敬意を表したい。
- セーフコミュニティの周知を進めることが大事
- 分科会がテーマ別と対象別でオーバーラップしているので、分科会同士で連携して認知度の向上や周知度や取組を進めてもらいたい。
- 取組が着実に進められている。小中高生にSCを認知させ、伝えていく視点がもっと必要。参加してもらうのではなく、主体的に関わるような取組が良いので、教育委員会との連携を進めてもらいたい。
- 取組を進めて出てきた課題に取り組むという過程でSCの取組が整ってきたように感じられる。
- ウォーキング、防犯、家庭内事故など対象を広げていくというのは重要。

<分科会への評価・助言要旨>

①こども安全対策分科会

- KYTは、こども会や青指の他にも、放課後キッズクラブや学童などへ広がっていくと良い。
- 中高生が小学生・幼稚園に教えることで、中高生への認知度アップにもつながる。

②スポーツ・余暇安全対策分科会

- 教師に対する研修はどうか？学校の部活指導者への研修はケガ減少に効果があったという海外の成果がでている。教育委員会とも連携していくべき。
- ウォーキングが健康に良いことは分かり易いが、SCとして、ケガ予防につながることを、もっとアピールした方が良い。

③交通安全対策分科会

- 25年度から大幅に事故件数が減少しているが、分析する際にはどのような事故が減っているか、事故種別や年齢などの視点から分析すると良い。
- ヘルメット着用は、罰則はないが法律で定められている。着用率を上げれば必ず再認証で評価されるので取り組むべき。中学生を対象にすると、学校との連携が課題となる。

④暴力・虐待予防対策分科会

- 「再認証に向けた重点取組」は是非進めて欲しい。
- ステップ3「児童虐待新規把握数」を指標とすると、元々の件数が少なく、取組の成果を評価しにくいいため、例えば「育児を楽しめる親の割合」など、取組の効果を評価できる指標設定の方が良いのではないか。
- 父子手帳は良い取組である。手帳の内容をアレンジすれば、中高生など子育てに関わる当事者以外にもアプローチでき、地域で子育てを見守る風土につながるのではないか。

⑤高齢者安全対策分科会

- 民生委員、シニアクラブ、保健活動推進員をプロジェクトメンバーとして集め、アイデアを出すなどの取組は素晴らしい。講演会などに参加しない方ほどリスクが高い傾向にあるが、この方法ならそういった方々にも伝えることができる。
- 日頃つながりの深い人から情報が伝わることで、入浴方法というなかなか変えられない長年の習慣を変えるきっかけになるのではないか。
- プロジェクトは、身近な人が展開していることで、リスクの高い人に取組が広がっていく良い例である。

⑥災害安全対策分科会

- 地域避難所の考え方がとても良い。阪神淡路大震災の際も避難所に行くことは大変だった。子どもを抱えた親や妊婦にとって、避難所は心理的にハードルが高い。福祉避難所として、保育所などを指定してはどうか。
- 煙の吸引など火災は致死率が高い事故であり、住宅用火災警報器は重要性が高いので、啓発方法を改善すべきではないか。
- 感震ブレイカーの普及啓発を始めるなら、普及前のデータを取っておくと、啓発後に効果を検証できる。

⑦自殺予防対策分科会

- ハイリスク者でも本人がメンタルヘルスの問題を自覚していない場合もある。ハイリスク者が専門家以外へ相談した場合でも対応できるような対応を検討してはどうか。足立区ではそのような仕組みがある。